

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.28 平成5年5月31日



縄文時代中期の鳥形把手

(T.N.No.9遺跡・稲城市坂浜出土)

道

先日、土曜日のこと、多摩の幹線道路が非常に混雑していたので裏通りに入った。この道は幹線道路が出来た十年前までは南大沢に抜ける旧道であって、かつて私達も発掘現場往復のための通い慣れた細く、曲がりくねった径でもあった。かつての旧道は、ニュータウン計画が進行するに比例しその多くが消えたり、寸断されたりして面影を残しているところが少なくなった。道端には、季節を謳歌する如く、ギボウシ・ウドなどの山野草が盛りであった。

さて、埋蔵文化財に関わる専門職員の数は、平成三年の文化庁統計によると四八五二名となり、その増加傾向は益々上昇中である。

この数をどう評価すべきなのだろうか？

報道関係にも毎日のように登場するのを見て、埋蔵文化財最盛期と言う人、否、それだけ文化財が危機に瀕している現象だと見る人、様々であろう。

多摩ニュータウンにおける発掘調査もその開始から既に四半世紀たち、その調査も峠を越えた。そして、埋蔵文化財センターもそろそろ青年期に掛かろうとしている今、その研究は益々細分化する一方、国民にわかり易い考古学の確立を求める声も高まってきている。

今年度の広報普及事業のメインは、九月二八日から十月五日まで、立川ルミネで多摩東京移管百周年記念事業として開催する「多摩の遺跡展」である。

私達は細心の注意と新鮮な発想で、一〇〇年先に続く道の一里塚としての遺跡展を成功させねばならぬと考えている。

(館野 孝)

遺跡だより③⑥



鉄器の出土状態

町田市小山地区の調査では、その範囲の拡大に伴い

次々に新たな発見があります。そんな中で今回は多量の鉄器を出土したNo.335遺跡について紹介します。

遺跡は浜街道の西側、町田街道から約300m程奥へ入った谷に存在します。調査では古墳時代の終わり頃、7世紀後半の住居跡や平安時代の土坑と住居跡の他、近世の墓跡等も検出されています。鉄器は古墳時代後期に属する一軒の住居跡から見つかりました。この住居は谷の斜面中段のやや平坦な面に掘りこまれ、一辺が約4mの方形を呈するもの

です。カマドは北壁の東寄りの所に作られ、この時期の住居の規模としては小さい方に属しています。

出土した鉄器は全部で15点を数え、このうち最も多いのは鉄のヤジリ（鉄鏃）で12本もありました。この他に、鉄製農具の鎌や穂摘み具等も検出されました。これらはいずれも住居の床近くにおかれた状態で見つかりました。

この中で特に注目されるのは多量の鉄鏃です。鉄鏃は言うまでもなく、矢柄の先端に装着して弓で射るための武器の一種です。出土した鉄鏃には、先端がノミ状に尖った細身のものと、鏃身が平な五角形を呈するものの二種類があります。この時期、鉄鏃は主に墓である古墳や横穴墓から多く発見されていますが、一軒の住居跡からこれだけ多くのものが検出されることは極めて稀なことです。周辺の遺跡では、調布市の上石原遺跡から10本出土した例

がありますが、出土しても1〜2本程度で本来住居跡には残されていないものです。しかも、No.335遺跡の場合ほとんどが完形品で占められているという点で、他に例を見ないものです。

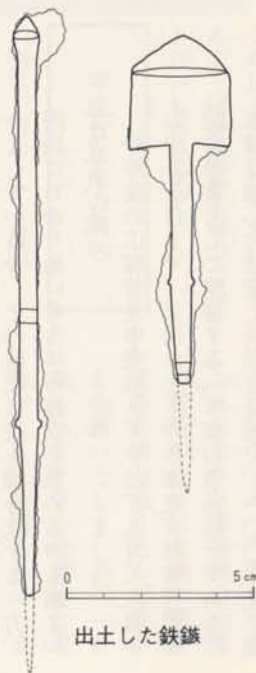
何故、住居跡内に豊富な鉄器が残されたのかについては、今後検討しなければならぬ問題です。一つの可能性としては、鉄器の修理や再生を行うために住居内に持ち込まれたとする考え方ですが、これまでの調査では、残念ながらそれを示す痕跡は認められていません。あるいは、遺跡の近辺に鉄器の生産や加工を行った場所が存在するのかもしれない。

いずれにしても、これだけの量の貴重な鉄器を有する人々が、小支谷内に居住していることが明らかになったことは、この地域の古墳時代の様相を考える上で、一つの参考材料になるものと思われれます。

（松崎元樹）



鉄器出土の竪穴住居跡



出土した鉄鏃

鉄器・青銅器の延命治療

今回はまず、当センターの展示コーナーを覗いてみることから始めましょう。展示資料には土器があれば石器もあり、木器があれば鉄器や青銅器もあります。よく見るとこれらのなかには保存のための特別の処置を施してあるものがあります。木器については前回で紹介しましたので、今回は鉄器や青銅器といった金属器類の保存処理について触れてみましょう。

病院さながらレントゲン写真を撮影し、同時に一つ一つにカルテを用意し治療（処理）過程を記録します。さてまず大切なのは錆びる原因となる要因をできる限り取り除くことです。第一に水です。水分は百度で蒸発するので、強制的に加熱して遺物のなかに含まれている水分を除去します。ここまでは鉄器も青銅器もだいたい同じです。また塩分が錆の要因になることは、潮風の吹く海岸近くでものが錆びやすいことでもよく知られています。そこで鉄器の中の塩化物イオンを誘い出すためにうすいアルカリ性の液に漬けておきます。その後、しみ込んだアルカリを再び取り除くために蒸留水としてアルコールを使用します。一方の青銅器は水分を取り除いた後、塩化物イオンの腐食活動を封じ込めるためにベンゾトリアゾールという特殊な薬品をアルコールにうすめてしみ込ませます。これで鉄器・青銅



展示ホールへようこそ…

器とも強化工程への下準備ができました。いよいよ次は、これらに合成樹脂をしみ込ませて強化する工程です。再び遺物を強制乾燥し、あらかじめ十分に水分を取り除いておきます。これは少しでも樹脂をしみ込みやすくさせるためです。乾いたスポンジと濡れたスポンジとで水を吸い取るとき、乾いている方がより多く吸い取ることが容易に理解できます。しみ込ませるのは主にアクリル樹脂の液体で、水溶性のものやアセトンやナフサンなど有機溶剤で溶かして使うものなどがあります。遺物にこれらをしみ込ませる場合、液のなかに漬けてしまえばよいのですが、ここでは一層の効果を狙って減圧します。すなわち遺物を漬けた容器を密閉するか、その容器をさらに密閉容器のなかに入れてポンプなどによって遺物細部の凹凸に残っている気泡を取り除き樹脂溶液と入れ替えるわけです。容器から遺物を取り出した後、樹脂の溶剤を完全に蒸発させれば、しみ込んだ合成樹脂が遺物に強度を加えてくれるというわけです。これが保存科学室で行われている保存強化処理のおおまかな内容です。もう一つ大切なことは、その後の保管であります。処理した遺物でも高温高湿におくと再び劣化しはじめます。常に光に曝され暑い展示ケースの中は保管環境

としては決して好ましいとはいえませんが、遺物をむき出しでおかないようにしたり、またケースの中を環境調整するのも重要です。錆だらけで出土した鉄器や青銅器が保存処理の結果、どのように変貌したのか、そしてどのように展示されているのか、その一例を当センター展示室にいらしてみなさんの目で実際に確かめてください。

(石川隆司)

ル樹脂の液体で、水溶性のものやアセトンやナフサンなど有機溶剤で溶かして使うものなどがあります。遺物にこれらをしみ込ませる場合、液のなかに漬けてしまえばよいのですが、ここでは一層の効果を狙って減圧します。すなわち遺物を漬けた容器を密閉するか、その容器をさらに密閉容器のなかに入れてポンプなどによって遺物細部の凹凸に残っている気泡を取り除き樹脂溶液と入れ替えるわけです。容器から遺物を取り出した後、樹脂の溶剤を完全に蒸発させれば、しみ込んだ合成樹脂が遺物に強度を加えてくれるというわけです。これが保存科学室で行われている保存強化処理のおおまかな内容です。もう一つ大切なことは、その後の保管であります。処理した遺物でも高温高湿におくと再び劣化しはじめます。常に光に曝され暑い展示ケースの中は保管環境

カ	ー	ド	作	成
事	前	調	査	
洗			浄	
脱			塩	
錆			落	
乾			燥	
接			合	

樹	脂	含	浸
錆	落		し
接	合	・	復
樹	脂	塗	布
記	録	・	点
保	守	・	管
			理

鉄器処理フローチャート

「多摩の遺跡展」の
開催日程決まる

多摩東京移管百周年記念事業の一環として、多摩ニュータウン遺跡群の出土遺物を中心に公開展示し、多摩地域の先史・古代史を身近なものとすると共に、埋蔵文化財保護思想の普及と充実をはかるため展示会を開催します。

テーマ「多摩のムラと生活」として当時の社会のあり方を中心に展示します。
日時 平成5年9月28日(火)～10月5日(火)

午前10時～午後7時
(最終日は午後3時まで)

会場 立川ルミネ9階

ウィルホール(立川駅ビル)

主催 東京都教育委員会

助 東京都教育文化財
団 東京都埋蔵文化財センター

協力 東京都町村教育委員会連合会

縄文中期の時代

「TAMARAいふ21」の事業の一環として今秋「多摩の遺跡展」が開催されます。この遺跡展では、「多摩地域の縄文時代中期のムラ」をテーマの一つに掲げています。そこで今回は、縄文時代の中頃つまり中期とはどんな時代であったのかを簡単に紹介しましょう。

縄文時代中期(約五千～四千年前)は、一万年続いた縄文時代の中で、もっとも繁栄した時代であったといわれています。なぜ繁栄できたのか、その大きな原因として当時の自然環境が考えられます。当時の気候は、今とほとんど変わりなく関東・中部から東北地方の東日本一帯にかけては、コナラやクリの落葉広葉樹がうっそうとおおいげった森が広がっていました。縄文時代は、採集や狩猟によって食料を得ていた時代です。この四季に富む豊かな自然のおかげで、人々は木の实



縄文時代中期の集落跡(八王子市松木)

などの植物や鳥や獣などのたくさんのおもてつけに恵まれたのでした。川や海では魚や貝がたくさんとれました。このような環境のもとで、人々は安定した生活を送ることができたのです。これによって、生活に余裕が生まれたせい社会にさまざまな変化が現れます。

生活が安定してくると各地で大きな規模のムラを作るようになりました。中央に広場を持ち、そのまわりを家や土器の置き場とする「環状集落」と呼ばれるものです。「環状集落」は、縄文時代前期(約六千～五千年前)に出現しましたが、多摩地域に大規模な集落がさかんに作られたのは中期です。中に墓地を設けたムラもありました(写真)。

また、派手といっているほど装飾に富んだ土器が作られました。縄文土器といふと皆さんの多くが思い起こされる勝坂式土器です。なかには、ヘビやカエルをかたどったと思われる模様や人の顔をイメージさせる飾りが施されているものもあります。

日常生活以外の祭りや祈りに使われたとされる道具が発達したのも中期でした。粘土で作られた人形(土偶)や石で作られた男性のシンボル(石棒)が代表的なものです。なぜ発達したのでしょうか。当時の社会は、先にも述べたように自然の恩恵なしには成り立ちませんでした。天災によって時として不幸をもたらす自然は、同時に幸福をもたらすものでもあったのです。そこで人々は、食料が豊富にとれムラが末永く繁栄するようにと生命の象徴とされる土偶や石棒でお祭りをし、自然に感謝と祈りを捧げたのだと考えられています。

いった中期は、まさしく「花ひらく縄文文化」だったのです。しかし、この華やかな文化は次の後期には受け継がれず衰退してしまっています。気候の冷涼化がその原因といわれていますが、謎は多く今後ますますの研究が期待されます。

縄文時代は、自然と共存し自然をうまく利用した時代でもあります。環境保護・地球にやさしい生活と経済が叫ばれる今日、自然を生かした社会作りのヒントが縄文時代の中にあるかもしれません。時間に追われる現代の世ですが、たまにはのんびりと我々の祖先の暮らしについて考えてみるのもいいものです。そこには、我々現代人が失ってしまった何かが見つかるとは思いません。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

(中西 充)

文化財講演会・映画鑑賞会等のご案内

本年は多摩地域の遺跡を中心に、その発掘調査と新しい研究成果を紹介すると共に、多摩の歴史を考える場を提供したいと思います。ふるって、ご参加下さい。

主催 (財) 東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター

後援 (財) たましん地域文化財団

参加費・定員 無料 会場1：120名 会場2：200名 先着順

会場1：東京都埋蔵文化財センター会議室（多摩センター駅、徒歩5分）

日時	講師/行事名	演題/内容
6/4 (金) 18:30~	中西 充	多摩地域にみる定住型集落の始まり
20:00	(センター調査研究員)	—同心円集落の象徴性
6/12 (土) 11:00~	文化財映画鑑賞会	映画「古代史の発掘」の上映
11:40		
13:30~	有吉重蔵氏	むさし国分寺のはなし
15:00	(国分寺市教育委員会)	
6/18 (金) 18:30~	荒井健治氏	むさし国府のはなし
20:00	(府中市教育委員会)	
6/23 (水) 18:30~	橋本博文氏	古墳時代の多摩
20:00	(早稲田大学)	
6/25 (金) 18:30~	福島宗人	中世の多摩集落
20:00	(センター調査研究員)	
8/4 (水) 13:30~	映画鑑賞と展示説明の会	映画「奥会津の木地師」の上映
15:30		展示ホールの解説
8/27 (金) 18:30~	服部敬史氏	多摩の古代窯業
20:00	(八王子市教育委員会)	
9/11 (土) 11:00~	文化財映画鑑賞会	映画「森と縄文人」の上映
11:45		
13:30~	可児通宏	縄文の集落
15:00	(センター主任調査研究員)	

会場2：たましん国立支店4Fホール（JR国立駅南口駅前）

日時	講師/行事名	演題/内容
9/17 (金) 18:30~	舘野 孝	多摩の5万年
20:00	(センター主任調査研究員)	
10/3 (日) 14:00~	永峯光一氏	縄文の世界
15:30	(國學院大學)	

人の動き

4月1日付けで、総務課 富安澄江経理係長が都教育庁福利厚生部福利課へ転出されました。後任には同日付けで都福利厚生事業団から大橋伸子が就任しました。

また、調査研究部佐藤 攻係長が都教育庁文化課調 整係へ転出し、後任には同 文化課から安孫子昭二が就 任しました。

佐藤係長は昭和55年7月 のセンター発足以来になり ますから12年9カ月勤務さ れました。センターの設立、 新施設の建設、移転、多摩 ニュータウン事業の調整、 都心部遺跡調査の調整へと 多忙を極めていましたが、 今度はより高所からセンター の指導、調整をお願いする ことになると思います。ご 苦労さまでした。安孫子係 長は多摩ニュータウン遺跡 群の調査では昭和40年以來 の経験がありますので、今 後の当センターでの活躍が 期待されています。

板橋分室のオープン

板橋区菅原神社台地上遺 跡の調査のために5月17日 (月)、当センター板橋分室 が開設されました。白子川 の対岸に埼玉県を望む台地 上に立地し、弥生時代の堅 穴住居跡が多数発見できる のではないかと予測されて いました。

これには比田井民子調査 研究係長、鶴間正昭、小松 真名、伊藤 健調査研究員 が発掘調査にあたります。

調査前の予想通り、早く も5月末現在、弥生時代の 住居跡と推定できるもの約 60軒、方形周溝墓と推定で きるもの約10基、縄文時代 の住居跡と推定できるもの 約10軒発見されています。



遺跡の位置

文部省科学研究費 補助金の交付

文部省から平成5年度科 学研究費補助金交付の内定 通知が当センター職員あて にありました。

及川良彦「粘土採掘穴の 研究(一土器作り用粘土の 採掘技術と変遷)」

佐藤 攻「江戸時代遺跡 出土遺物の取扱いについて」

佐藤宏之「東日本におけ る後期旧石器時代後半期か ら縄文時代草創期への移行 に関する基礎的研究」

西澤 明「縄文時代にお ける墓制の基礎的研究」

福島宗人「南関東におけ る中世後半の陶磁器の様相― 近世的陶磁器の出現と流通 を考える―」

山口慶一「縄文時代成立 期、ヤスの出現とモリの登 場」

例年は1〜2人の補助金 交付が普通ですが、今年は 実に6人ももの交付内定があ りました。記録的ともいつ てよいものです。これに引

平成5年度の展示

引き続き成果を期待したいと ころです。また、来年度も これ以上に交付が受けられ るよう研究計画を練ってお きたいものです。

例年、当センター展示ホー ルでは多摩ニュータウン遺 跡群の調査成果を中心に展 示を行っています。が今年 も展示の様様替えが行われ ました。



展示ホール

焦点をあてた展示「縄文誕 生」を常設展示として公開 していただきました。今年が多摩 ニュータウン遺跡群の二層 の理解のために最新の調査 成果を極力盛り込んだ展示 を企画いたしました。「多 摩ニュータウンの遺跡と遺 物」として公開されていま す。

あとがき

3月末に前号「たまのよ こやま」を発行できました。 しかし2カ月をおかずこの 号を発行することになり ました。これは今年の秋に 行われます「多摩の遺跡展」 をできるだけ多くの方々に みていただきたい、そのた めにはPRを広くと考える のことです。よろしくお願 いします。(やすみち)



発行

財団法人 東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2
☎ 0423-73-5296
平成5年5月31日